

山地の稜

宮沢賢治

青空文庫

高橋吉郎が今朝は殊に小さくて青じろく少しけげんさうにこつちを見てゐる。清原も見てゐる。たった二人でぬれた運動場の朝のテニスもさびしいだらう。そのいぶかしさうな眼めはどこかへ行くならおれたちも行きたいなと云いふのか。それとも私が温床へ水でも灌そそぐところかも知れないと考へてゐるのか。黄いろの上着を着たつてきつと働くと限つたわけぢやないんだぞ。私は今朝は一ちよつ寸の間とつめたい草を見て来たいんだ。だから一人だ。つれて行かない。大事なんだから。

温床とこはれた浴槽よくさう。

こゝの細い桑も今はまったくやはらかな芽を出した。その細桑

の灰光は明らかで光ってそしてそろってゐる。

すぎなは青く美しくすぎなは青くて透明な露もとまって本当に新らしいのだ。

右手の奥の方では寄宿の窓のガラスも光る。黄ばらのひかり、すぎなと砂利。

これはレールだ。

それから影だ。手帳。

ゆっくり行けば朝のレールは白くひかる。強くて白くかゞやく、子供のうすい影法師、私は線路の砂利も見る。

ごくあたり前だがぬれてるやうな気もします。

工夫がうしろからいそいで通りこす。横目でこつちを見ながら

行く。少し冷笑してゐるらしい。それでもずんずん行つてしまふ。万法流転。流れと早さ。も一人あとから誰か来る。うしろから手帳をのぞき込まうとするのか。それでも一向差支へはない。やつぱり工夫だ。ところが向ふのあの人は工夫ではなかつたんだな。大工か何かだつたな、どてをのぼつて草をこいで行つてしまふ。

この横が土木の似鳥さんの泊つてゐる家だ。女もある。そのうちの前で手帳なんかをひろげたつて一向気取つたわけぢやない。

(紙の白と直立。)

一向気取つたわけぢやない。しなければならなくてしてゐるんだ。けれどももしこれがしんとした蒼黝あをぐろい空間でならば全くどんなにいいだらう。それでも仕方ない。

低い崖がけと草。草。東の雲はまっ白でぎらぎら光る。

虎戸とらとの家だ。虎戸があすこの格子からちらつとこつちを見たか
もしれない。けれどもどうも仕方ない。あすこの池で魚を釣つて
ゐるのは虎戸の弟だ。たしかにさうだ。

立派だ。この雲のひかり Sun-beam がまぎしく今日もそゝいで
ゐる。

雲は陽ひを濾こす、雲は陽を濾すとしようかな、白秋にそんな調子
がある。

向ふから女の人と子供がやって来る。みたやうな人だ。純じゆん哉んや
さんのうちの人だ。知らない風で行かうか。何か云ひさうだ。と
まる。

の妹は唇が紫で心臓が悪かった。この人も少し紫だ。

「はあそでござんすか。」この人の鼻はけはしくて写樂のやうに見えるけれどもどこか立派なところもある。

「それがらおうちのあねさんおあんばい悪いふでごあんすたなぢよでお出やんすべなす。」

「はあ、あんまり変らなござんす。」

「おりやの米子よねこどもいっつもお話し申してあんす。」

ありがたう。そんなにほかの人までが考へてゐてくれるのかな、おれでさへ昼学校では大抵まぎれて忘れてゐるのだ。

「ほんとおありがとござんす。」おじぎをしたのでこの人はもう行かうとする。いまはお礼を云つたのだ。もう一ぺん云はう。

「ほんたうにおありがとござんす。暖ぐなつたらど思つてゐあんですたどもやっぱりその通りで善ゆぐもならないで。」

「まあんつたびだび米子どもお話してあんすすか。」

「おありがとござんす。」

「おありがとござんす。」

汽車はのぼつて来るのぼつて来ると子供が云つてゐる。人は影と一緒に向ふへ行く。私も行く。

雲が白くて光つてゐる。早池峰はやちねの西どなりの群ぐんじやう青あおの山りやうの稜りやうが一つよど澱よどんだ白雲に浮き出した。薬師岳だ。雲のために知らなかつた薬師岳の稜を見るのだ。

今日も鳥なが啼ないてゐる。お城の方へ行かうか。おしろには前の

日曜のさみしさがまだ浸み込んで残つてゐるからだめだ。さうして見るともつと東の遠くの方まで出かけよう。

製板所も見えます。向ふから工夫がひとりやつて来る。ちやう

ど私にぶつつかるばかりだ。私は線路をあるいてゐます。一寸

でも挨拶あいさつしよう。けれどもそれもをかしい。たゞ私はみちを避

けよう。さうだ。この人は何とも思つてゐないのだ。ずるぶんみ

んな歩くのだからすつかりなれてしまつてゐるのだ。それから瀬

川の鉄橋のたもとから髪の毛の長いせいの低い太った人が出て来ます。

黒沢のやうにも見える。黒沢にしては何だか顔が厳しいやうだ。

やっぱりさうだ。

「今日何処まで。」

「はあ、すぐそごまで、お通しやてくなんせや。」

「はあ、いゝえ、向ふ側さすか。」

「はあ。」

鉄橋のこつち岸の石垣いしがきを積み直すのだ。今日はずるぶん人が来てゐる。請負の「二字分空白」さんも居るだらう。ずうつと足の下だ。こつちは橋の上を行くのだから一向かまはない。南の方はそら一杯に霽はれた。土耳古玉トルコだ。それから東には敏感な空の白髪が波立つ。光の雲のうねと云った方がいゝ、南はひらけたトウクオイス、東は銀の雲のうね、書いて行かうか。けれどもどうも斯かう云ふ調子にのつた語ことばは軽薄でいけない。それでもやつぱり仕方ない。

もう鉄橋を渡って行かう。鉄橋を渡るときポケットに手を入れて行くのはいゝにはいゝんだ。下でも人が見てゐるし。けれどもやっぱりごく堅実に渡って行くのだ当然だ。人はゐるゐる。あの二つの顔は知つてゐる。枕木まくらぎはうすい灰色曲つたり間隔もずるぶん不同だ。水がたしかに下を流れてゐるけれどもおれはそれを見ようとはしない。気にかゝるのは却かへつて南のトークオイスの光の板だ。

渡れ渡れ、一体これではあんまり枕木の間隔がせますぎるのだ。おほまた 大股おほまたに踏んで行かれない。もう水の流れる所も通つたし、ずるぶん早い。この二枚の小さな縦板は汽車をよけるため為のだな。こゝで首尾よくよけられるだらうか。もし今汽車がやって来たらね

おりるかぶら下るかだ。まづすばやく手帳と万年筆をはふり出すことだ。それからあとはもう考へなくてもいいぞ。

すぐ向ふ岸だ。砂利の白や新鮮なすぎな。

着いた。立派な野菜だごぼうや何か。

すなつち。

馬は黒光り、はねあがる。はねあがれば馬は竜だ。赤い眼をして私を見下す。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十四巻」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力：林 幸雄

校正：mayu

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 ([http://www.aozora.gr.jp/](http://www.w.aozora.gr.jp/)) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

山地の稜

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>